

27PE-pm064

理札氏薬物学(第六卷)にみる薬物

○西野 正雄⁷, 澤田 采佳⁴, 小松 直登³, 木村 壮太郎², 西野 ゆり⁶,
森田 祐基⁵, 林 優樹⁷, 菰田 綾佳², 宮本 如奈¹, 高倉 弘士⁸, 畠山 有理⁹(¹同志社大学(文), ²府立藤井寺高校, ³府立東住吉高校, ⁴府立西浦高校, ⁵科学技術学園高校, ⁶府立長野高校, ⁷府立富田林高校, ⁸立命館大学大学院(社), ⁹長崎大学(薬))

「はじめに」・・明治五年に刊行された理札氏薬物学は、アメリカの戒施理札著、備後福山の小林義直訳の一五冊一七巻の書物である。第六巻全文を解説し紹介する。

「内容」・・理札氏薬物学は、一六巻で構成されている。漢字とカタカナ、時にカタカナを付けた英語により表記されている。巻六巻衝動薬では動脈衝動薬、神経衝動薬を扱っている。動脈衝動薬は、炭酸アンモニア(芳香性アンモニア精、アンモニア精)、テレピン油(テレビ^oン擦入油)、番椒(番椒浸、番椒チンキ、番椒油脂)、アルコール(再留アルコール、強烈アルコール、希アルコール、焼酎、穀酒、葡萄酒、アメリックアルコール)、リン(結晶リン酸、希リン酸)。神経衝動薬は、カストレニウム(カストレニウムチンキ)、麝香、阿魏(阿魏チンキ、阿魏混和剤、阿魏硬膏)、ゴムアンモニアク、カルバニウム、琥珀油(再留琥珀油、琥珀酸)、カエプト油、吉草(吉草油、吉草酸、吉草浸、吉草チンキ、吉草アンモニア精チンキ、吉草アルコールエキス、吉草流動エキス、吉草酸アンモニア)、アルニカ(アルニカチンキ、アルニカアルコールエキス、アルニカ硬膏)、ダラコンチュム、スキュテラリア、シプリペジューム、コーヒー、茶の以上の44種に関して記載。

「考察」・・第六巻中の動脈衝動薬の特徴は、血中に吸収されると心臓及び動脈の作用を促し、筋系を健全化し、脳及び神経の精力を鼓舞する。また、強壯薬との差異は、作用が迅速で、分泌器に至ると分泌を増加し、去痰薬、発汗薬や利尿薬となる。神経衝動薬の特徴は、脳に作用し、機能抑制あるいは知覚麻痺を起こし、脳及び神経中心から始まる神経系の変調を原因とする神経機能を衝動して鎮静の効果を引き起こすと説明されている。